



ワトウルフ神話TRPG

## 今日はロボット恋をする

恋人に呼び出され、恋人の家に赴いたあなた。  
しかしそこに恋人の姿はなく、床には一台のロボット掃除機。  
「こんな姿になってしまったけれど、僕は、君のことを――」

### 【シナリオ概要】

ロスト率：低

PL人数：1名固定

所要時間：テキセ1～2時間（RPによる）

戦闘：なし

後遺症：なし

推奨技能：＜目星＞＜図書館＞

継続探索者可。ただし、1ヶ月弱前から石庭翠と交際しているものとする。

（石庭翠と異性・同性は問わない）

※次ページからKP情報

## 【経緯】

探索者の恋人は、人類の体を借りたイス人である。

現代について知るためにやってきた。2ヶ月前に探索者と出会い、1ヶ月前から交際している。交際は順調で、今回の研究には何の問題もないように思われた。

しかし、今は肉体の持ち主——つまり今はイス人に紛れて生活している男が禁を犯す。当然ながら生かしておく訳にはいかないが、イス人の体のまま男を殺すわけにはいかないため、先に肉体を男に返却しなくてはならない。

恋人は泣く泣く、探索者との最後のお別れに来たのである。

尚、彼が探索者と出会ったのは中身がイス人になってから。体の持ち主とは会ったことがない。

この”ロボット掃除機”には、知的生命体が組み込まれている。これはミ=ゴの研究による物である。

## 【登場人物】

石庭 翠（いしば すい）

探索者の恋人。研究職の男の体を借りたイス人。元々恋愛に興味があって手を出したが、探索者の事は本当に愛している。

穏やかで優しい。頭も良いが、少々世間知らずなところもある、という印象。  
（イス人だから）

シナリオ中では急拵えで手足のないロボットに入っているため、ボタンを押すなどの動作ができない。空は飛べる。残念ながら掃除は出来ない。

性格や来歴を適宜改変して KPC 扱いにしても問題はないが、KPC がイス人と言う点は変更出来ないため、大半のシナリオで使用出来ない点に注意すること。シナリオ中では男性として書いているが、性別の改変は問題ない。

デフォルト名：本木 令（もとき れい）

研究職の男。イス人と契約して体を貸す代わりにイス人の国でもてなされていたが、禁書を読覧し、また拘束された際に暴れたため死刑となる。

少し神経質で独善的な性格。家族や友人にはイス人との取引を伝えていない。シナリオ開始時点ですでに死亡しており、いずれのエンディングでも事故死扱いとなる。

APP は 12。

## 【ネタバレについて】

SNS 等で等シナリオの内容に触れる場合は、ふせった一等でワンクッション置いてネタバレに配慮すること。(公開範囲はだれでもで問題ないかと思います)特に以下の内容はエンディングや真相に深く関わるため、注意が必要。

- ・ル〇バと付き合うことになった
- ・イス人と付き合うことになった
- ・ル〇バに振られた
- ・イス人に振られた
- ・あのメールってミ=ゴじゃない?!
- ・えっ?!こんな状況でも入れる体ってあるんですか?!
- ・エンド名 (「エンド A」までは OK)

#### 【その他】

全部コピペで済ませたいしどうあがいてもソロシナリオなので「探索者」ではなく「あなた」と記載している。適宜修正して利用のこと。

※当シナリオは酒田紺個人が趣味で作成したものであり、全ての企業・団体とは一切関係ありません。

## 導入

※事前情報として、恋人の氏名と「およそ 1 ヶ月前からあなたと付き合っている」ということを、PL に伝える。

金曜深夜。

あなたのもとへ、恋人からメッセージが届く。

『急にごめん、明日、うちに来られないか？』

あまり深夜に連絡を取らない人だ。何かあったのかも知れない、と思うことだろう。

胸騒ぎを覚えながら、あなたは眠りにつくだろう。

(恋人は事態への対応に追われているため家にいません。すぐに行きたいと言われた場合は『まだ職場にいるから……』等断る)

▶恋人の家に行かないことにした場合：エンド D へ

## 恋人の家へ

恋人の家までの道のりはもう何度も通っている。引っ越してきたばかりで道が分からないと言う彼を、何度も迎えに行ったからだ。

彼の住むアパートは三階建ての小綺麗なアパートだ。彼は三階の角部屋に住んでいる。部屋の中も綺麗に整理整頓されていることを、あなたは知っているはずだ。何せ合鍵までもらっている仲なのだから。

インターホンを鳴らすと中から声がする。どうやら恋人の声のようだが、応答ボタンを押していないらしく、何を言っているか聞き取りづらい。

<聞き耳>

成功→「今手が離せないから合鍵で入ってくれ」と言っているのが聞こえる。

失敗→よく聞こえなかった。

<アイデア>もしかしたら何か手が離せないのかも知れない。合鍵で入れれば良いのだろうか、と思いつく。

合鍵を使って中に入ると、そこに人の気配はなかった。

短い廊下を抜けて突き当たりの扉を開ける。

埃ひとつない清潔な部屋。

真ん中には見慣れないロボット掃除機。あなたが見たことのないものだ。クリアブラックのボディーの中で、緑のランプが光っているのが見える。

「来てくれてありがとう。急に呼び出して悪かった」

愛する恋人の声がした。

「信じられないかも知れないが、君の目の前にいる機械が、石庭翠なんだ……」

愛する恋人の声は、確かに、そのロボット掃除機から聞こえていた。

あなたの知る恋人は、そんなタチの悪い冗談を言う人ではない。

信じがたいが、この掃除機が彼なのだろうか。それを信じられなかったとしても、彼に何事か起きている、ということは分かるだろう。

SANc<1/1d3>

※申し出があった場合は先に少し室内探索させても OK。

※その場を動いた場合は、石庭翠に後をついて行かせて、空飛ぶ石庭を目撃させる。SANc<0/1>

**【RP 例】**

本当に石庭翠なのか？→「ああ。信じられなくても無理はないけど、そうだよ」

何故そんな姿に？→「ごめん、詳しく説明することはできないんだ」

何故呼び出したのか→「君に、大切な話をしなくてはならないんだ」

一通り話し終えたところで、彼は言いよどむように間を開けた。本来ならば深呼吸でもしている場面かもしれない。しかし機械になってしまった彼に、呼吸音はなかった。

「……もう、僕は元の体には戻れないんだ。君にお別れを言わなければならない」

いつも通りの優しい声だった。

突然機械になってしまった恋人に、突然別れを告げられたあなたは SANc<0/1>

あなたが口を開こうとしたその時、彼から突然、電子音が鳴り響いた。

「まずい、充電が切れる……」

「こんな姿になってしまったけれど、僕は、君のことを――」

ふつり、と彼の声が途絶える。ボディーのランプは赤色に点滅して、やがて消えてしまった。

彼の言うとおりに充電が切れたのだろう。

▶ここで帰ることにした場合：エンド D へ

## 恋人の部屋

沈黙してしまった機械——いや、石庭翠を前に、あなたは立ち尽くしている。

### 【部屋の中】

見慣れた部屋だが、彼のいない部屋はやけに空虚で、物が少ないように思える。いや、実際少ない。そういえばはじめてこの場所に来たとき、やけに生活感のない部屋だと感じたのだった。あの頃は引っ越してきたばかりだからだと思っていたが、今もそれは変わらない。

彼が暮らしているのは、広めのワンルームだ。玄関を入ると短い廊下があり、右に風呂、左にトイレ、そして突き当たりにこの部屋がある。

入って左手の奥にはベッドが置いてあり、そのそばに PC ラックと本棚が並んでいる。

入って左手はリビングのような役割になっているようだ。ローテーブルとテレビ、それから二人がけにしては少々小さめのソファがある。そばにはキッチン、それからその向かいに、クローゼットの扉がある。

### 【探索可能箇所】

キッチン／本棚／クローゼット／ソファ／テーブル／テレビ／ロボット掃除機  
／PC デスク／ベッド

### 【キッチン】

そう大きくはないが、一人暮らしなら十分だろう、という広さのキッチンだ。戸棚を調べるなら、使いかけの油や調味料、綺麗に洗われた調理器具が入っていて、彼が自炊していることが分かるだろう。一度彼に手料理を振る舞ってもらったことがあるが、とても美味しかったことを、あなたは覚えている。

< 目星 or 冷蔵庫を調べる宣言 >

冷蔵庫の中が、妙にがらんとしている事に気がつく。

生鮮食品の類いは一つも見当たらず、入っているのはわずかな調味料と米のみ

だ。

まるで中身を処分したようだ、と思うだろう。

## 【本棚】

小説や漫画、自己啓発本から専門書、料理本まで、幅広いジャンルの本が雑多に収められた本棚だ。彼の部屋には物が少ないが、本棚だけは一人暮らしにしては大きく、本が好きなことがうかがえる。

### < 図書館 >

表紙に DIARY と書かれた、上質なノートを発見する。表紙はよく手入れされた革張りで、使い込まれているのだろうと言うことが分かる。

中を読もうとするならば、中の文字は手書きだが、一切読めないことに気がつくだろう。生まれてから今まで、一度も目にしたことのないような、見慣れない文字だ。まるで、この地球上には存在しないような――何か重大な秘密をのぞき見てしまったような予感に、SANc<0/1>

→< 目星 or 最後のページを見る宣言 > 日記の最後のページに、唯一見慣れた言語を見つける。どうやら、何かの ID とパスワードのようだ。

※ KP 情報：石庭は手書き文化を気に入って日記を付けていましたが、日本語ではない、人間の言語として存在しない言葉で書かれています。

## 【クローゼット】

シンプルな服ばかりがかかっている。彼とデートしたときに着ていた服だって、もちろんかかっていた。ただ、少し物が少ない印象を受けるだろう。

### < アイデア >

ワンシーズン分の服しか入っていない、ということに気がつくだろう。しばらくは問題ないだろうが、真冬になったら着る物がないだろう、という量だ。このクローゼットの他には、服を仕舞っておけるような収納も存在しない。

### < 目星/2 >



ベルトなどの小物が入ったかごの中に、ベルベットの小箱を見つける。  
もし箱を開けるならば、シンプルなペアリングが入っていることが分かるだろう。結婚指輪のような上等な物ではないが、恋人同士でつけるにはちょうど良いデザインに思える。

→<アイデア>一ヶ月記念の日が近いということを思い出す。もしかしたらあなたへのプレゼントかもしれない。

※ KP 情報：石庭が探索者へのプレゼントとして用意していたもの。

### 【ソファ】

二人がけの、布張りのソファだ。何度か彼とここで映画を見たことがある。有名なタイトルだったが、彼は初めて見るのだと言って、興味深そうに画面を見ていた。好奇心旺盛な子どものような横顔を覚えている。

### 【テーブル】

白木のローテーブルだ。上には何も乗っておらず、綺麗に掃除されている。

<目星>

テーブルの下に、ケーブルが落ちているのが見つかる。

→（気付いてなさそうなら）<アイデア>そういえば彼は充電切れだと言っていた。もしかしたらこのケーブルで充電出来るかも知れない、と思いつく。

### 【テレビ】

低いテレビ台の上に、テレビが設置されている。

<目星>

テレビ台の横に、手帳が落ちているのが見つかる。

中を見るのであれば、予定欄はほぼ真っ白だが、あなたとの一ヶ月記念の日にマークが付けられていることが分かる。

## 【ロボット掃除機】

あなたが見たことのない形のロボット掃除機だ。円盤状のボディはいかにもロボット掃除機らしいが、上部にボタンの類いは見当たらずつるりとしていて、目立った凹凸はケーブルの差し込み口だけだ。

<目星／裏面を見る>底面には吸い込み口があるものだと思っていたが、上面同様つるりとしていて、吸い込み口の類いは見当たらない。

<充電ケーブルを挿す>内部のランプが、オレンジに点灯する。しかし、彼が動き出す様子はない。

## 【PC デスク】

ノートパソコンが載った、シンプルな机だ。あなたは、彼がここに向かっていくところは見たことがないだろう。彼はあなたがこの部屋にいる間、二人でコミュニケーションを取ることを最優先する人だからだ。

<目星>

机の上には、『再起動マニュアル』と書かれた紙がある。

『充電後一定時間置くか、カードを近づけることで再起動することが出来る』と書かれている。

→<目星 or 裏面を見る宣言>マニュアルの裏面にカードが貼り付けてあることに気がつく

<パソコンをつける>

パソコンのボタンを押すと、ロック画面が開く。どうやらスリープモードになっていたようだ。しかし、IDとパスワードを入れなければ中は見られない。

<コンピューター/3 or 日記に書かれたIDとパスワードを入力>

パソコンを開くことができる。メールアプリが開いたままになっている。

メールを見るのであれば、『商品発送のご連絡』というタイトルのメールを見られる。どうやらこまめにメールを削除するタイプだったようで、それ以外のメールは削除されていることが分かるだろう。

メールの内容は以下の通り。

-----  
タイトル：商品発送のご連絡

石庭様

このたびは当店をご利用いただきありがとうございます。  
商品の発送が完了いたしましたのでご連絡申し上げます。

■ お荷物の出荷情報

-----  
注文日：○月×日（昨日の日付）

お届け先お名前：石庭翠様

お届け日：○月×日（昨日の日付）

お届け内容：人工知能搭載ロボット（通信機能付き）  
-----

お気づきの点がございましたら、お手数ですが当店までご連絡ください。

このたびはご利用誠にありがとうございました。  
またのご利用を心よりお待ちしております。

湯越株式会社

担当者 御護  
-----

【ベッド】

綺麗に整えられたベッドだ。部屋に来るたびに目にしたことのあるベッドだが、あなたがここを使ったことは一度もない。泊まらずに帰るよう促されていた。

【風呂場】

（探索箇所一覧にはないが、希望があれば見せても良い）  
よくある、手前に洗面所、その奥に風呂場がある作りの風呂場だ。中をよく見

るのであれば、使いかけのシャンプーやボディーソープなどが置いてあり、人が生活している痕跡があることが分かる。

一通り探索終了&石庭翠を充電していれば、石庭が起動して【別れ話】へ進む。

一通り探索が終わった状態で、まだ充電ケーブルを見つけていなかったり、充電することに気がついていなかったりする場合は、目星、アイデアを成功するまで振り直して良い。

ただし、ここでの振り直しの合計回数が5回を超えた場合は、別れ話の際石庭翠を説得することは出来ない。途中のRPに関わらず最終的にはエンドAとなる。

充電器以外の情報は、取り逃したとしても一応A以外のエンドに進むことは可能。

ただし、本棚、ロボット掃除機に対するロールを全て失敗していると、その後のRPへの影響が大きいため、他の技能で代用する、振り直させる等して適宜調整のこと。

## 再起動

ぴぴ、と小さな音が鳴る。その音は、ロボット掃除機——いや、恋人から聞こえたようだ。そちらを見れば、先ほどまでオレンジ色に光っていたランプが、緑色に点灯している。

「あれ……？」

彼は呆然とした声で呟く。

「もしかして、充電してくれたのかな。話の途中でごめんね」

「それで、その」

「僕は、君にお別れを言わなければならないんだ。勝手に申し訳ないけど、僕と別れてほしい」

彼は心底申し訳なさそうにそう言った。

※ここから RP 次第でエンド分岐。エンド分岐条件は以下の通り。

### 【エンド分岐】

#### エンド B

「石庭翠が元々人間ではないこと」を知った上で、

「それでも一緒にいたい」と伝える

#### エンド C

「石庭翠が元々人間ではないこと」を知った上で

「それでも一緒にいたい、あなたについて行きたい」と伝える

※探索者が今の暮らしを捨てる覚悟をした場合

#### エンド A

別れを受け入れるなど、上記以外の選択をした場合

【RP 例】

人間ではないのか？→「……そうだね、人間ではない」

だましていたのか？→「そう思われても、仕方ないとは思っている。実際、ずっと一緒にいられるわけないってことは分かっていたんだ、僕だって……」

正体はなんなのか？→「ごめんね、それは、君に伝える訳にはいかない」

探索者のことが嫌いになったのか？→「そんなわけない。君のことはその、大切に思ってるよ」

何故別れなければならないのか？→「僕はもう、君の知る石庭翠には戻れない。ここでお別れするのが、お互いにとって一番良いことだと思うんだ」

これからどうするのか？→「僕は、故郷に帰ろうと思っている」

故郷ってどこ？→「遠い、遠いところだよ」

※彼は人間ではないが、<心理学>を振ることも可能。彼に嘘をつくつもりはない。言えないところははっきり言えないと答える。

大体の情報は、RP 次第で出して良い。(なんならエンド C に出てくる情報も、故郷の話以外は出して構わない)

また、完全に条件通りでなくても、RP によって自然だと思えば各エンディングに進ませて OK。

## エンディング

エンドA：昨日あなたと恋をした

(別れを受け入れる)

「ごめんね、〇〇……」

彼は悲しげな声で、あなたにそう告げた。

こんな時、彼は本来どんな顔をするのだろうか。そういえば、彼の悲しむ顔は見たことがないことに気がつくだろう。記憶の中の彼は、いつだって笑っていた。

「さようなら。いつまでも、君のことを愛しているよ」

別れを惜しむように、彼があなたに触れる。丸いボディーの端が、あなたの足に触れる。冷たくて固い感触だった。

ぐらり、と視界が揺れた。

目の前が揺らぎ、遠くなり、ぷつりと途切れる。

まどろむように、沈むように、あなたの意識は落ちていった。

目を覚ますと、まだ明け方だった。見慣れた部屋はいつもと変わりなく、カーテンの隙間から朝日が一筋入り込み、あなたの頬を照らしている。

昨日、恋人と別れた。彼が故郷に帰らねばならず、あなたはそれについてはいけなかったからだ。記憶の中の彼は悲しげな顔をしている。

そこでふと、あなたは違和感を覚えるだろう。彼のそんな顔を、見たことなどあったらどうか。彼はいつだって笑っていたような気がするのに、その顔は不思議と思いつけない。

しかし、気のせいと片づけてしまえるような、些細な違和感だ。

不思議に思いながら、あなたは布団を出るだろう。

そしてまた、平穏な日常が始まる。

エンドA：昨日あなたと恋をした

エンド報酬：なし

※探索者は、恋人がロボット掃除機になった記憶を失っており、元の恋人と別れ話をしてそれを受け入れたと認識している。

エンドB：明日もル〇バと恋をする

（「石庭翠が元々人間ではないこと」を知った上で、「それでも一緒にいたい」と伝える。）

「〇〇……」

彼は戸惑ったように、あなたの名前を呼ぶ。

「分かってて、言っているのかい？ 僕は、元の姿には戻れないんだよ」  
「……それでも、君と一緒にいても、良いのだろうか」

泣いているような声でそう言いながら、彼があなたに触れる。丸いボディーの端が、あなたの足に触れる。冷たくて固い感触だった。

「こんな姿になってしまったけれど、僕は、君のことを愛しているよ」  
「これからどうか、一緒にいてほしい」

人の姿を失った恋人と、あなたはどんな恋をするのだろうか。  
これまでのように彼の家遊びに行っても構わないし、彼と一緒に暮らすのも良いだろう。彼がどんな姿になったとしても、愛し合う二人が共にあるのは、約束されたことなのだから。

そしてまた、平穏で奇妙な日常が始まる。

エンドB：明日もル〇バと恋をする

エンド報酬：SAN回復 1d3



エンドC：明日もあなたと恋をする

（「石庭翠が元々人間ではないこと」を知った上で「それでも一緒にいたい、あなたについて行きたい」と伝える）

「〇〇……」

彼は戸惑ったように、あなたの名前を呼ぶ。

「そうだな……君には、本当の事を話そうと思う。君にとっては突拍子もない話だけれど、聞いてくれるかい？」

「僕は遠い未来、もしくは過去……君の知らない遠い時空からやってきた。体はその時空に置いたまま、精神だけをこの時代の人間と交換する方法でね」

「そう、君の恋人として振る舞ってきたあの体は、僕のものではない。僕と精神を交換した男のものだ」

「本当は、もう少し借りていられるはずだったけど、トラブルがあってね。彼に体を返さなければならなくなってしまったんだ。だから僕はもう、あの体に戻ることはできない」

「それに、君を僕の暮らしていたところに連れて行くのも難しい。何しろ時代が違うからね。普通の方法では連れて行けないんだ」

彼はそこで言葉を切る。ううん、と唸るような声が漏れる。  
はじめて聞く声だ、とあなたは思うだろう。記憶の中の彼はいつでも笑っていたから。

「クローゼットの小物入れの中にある、箱を持ってきてほしい」

あなたがクローゼットの小物入れの中を見に行くならば、ベルベットの小箱が見つかるだろう。

「……もう、あの体は返してしまったけれど、もし、君が許してくれるなら、待っていてくれないか」

「今度はちゃんと、もう一度、人として戻ってくる。それまで、待っていてほしい」

彼に促されて箱を開けると、中にはシンプルなペアリングが入っている。

「本当は記念日に上げようと思っていたんだ」

「そのリングを目印にしよう。君の知らない姿になってしまうけれど、必ず、そのリングを持って戻ってくる」

「どんな姿になっても、僕は、君のことを愛している」

別れを惜しむように、彼があなたに触れる。丸いボディーの端が、あなたの足に触れる。冷たくて固い感触だった。

ぐらり、と視界が揺れた。

目の前が揺らぎ、遠くなり、ぶつりと途切れる。

まどろむように、沈むように、あなたの意識は落ちていった。

目を覚ますと、明け方だった。スマートフォンを見れば、日曜日になっている。見慣れた部屋はいつもと変わりなく、カーテンの隙間から朝日が一筋入り込み、あなたの頬を照らしている。ちか、と視界の隅で何かが光る。左手を持ち上げてみれば、あなたの薬指にはシンプルな指輪がはまっている。彼が目印にしようと言った、シンプルなペアリングだ。

彼はいつ戻ってくるだろうか。胸を躍らせながら、あなたは布団を出る。

そしてまた、平穏な日常が始まる。

エンド C：明日もあなたと恋をする

エンド報酬：SAN 回復 1d5

※恋人はちゃんと2ヶ月後くらいに、全然別人の姿で戻ってきます

## エンドD：いつか誰かと恋をした

日曜日の朝。

あなたは自室で目を覚ます。見慣れた部屋はいつもと変わりなく、カーテンの隙間から朝日が一筋入り込み、あなたの頬を照らしている。

休日の朝だ。何をしても良いし、何もしなくても良い。

友人を誘ってどこかに出かけるのも良いかもしれない、何しろまだ朝早い時間帯だ。ここしばらく恋人はいないから、自由に時間を使ったって問題ない。

そこで、あなたは違和感を覚えるだろう。何かが足りないような気がする。

見回しても、なくなった物など何一つない。ただ少し、何かが、足りないような気がする。気のせいと片づけてしまえるような、些細な違和感だ。

不思議に思いながら、あなたは布団を出るだろう。

そうして、1人きりの、平穏な日常が始まる。

## エンドD：いつか誰かと恋をした

エンド報酬：なし

恋人との全ての記憶を失う。

また、恋人を友人などに紹介していた場合、彼らの記憶も消えている。

